

平成30年3月霧島山(新燃岳)噴火に伴う対応

平成30年3月13日
宮崎河川国道事務所

○霧島山(新燃岳)で平成30年3月1日11時頃噴火が発生。3月6日以降、11日15時までに爆発的噴火が42回発生。また、6日以降、火口内で溶岩の盛り上がりを確認され、9日には北西側への流出が確認された。(噴火警戒レベルは3が継続)

○降灰状況及び火口付近の状況の把握のため、九州地方整備局がヘリ調査(3月1日、6日、9日、10日)や地上からの現地調査(3月2日、3日、6日、7日)を実施。9日はテックドクターによるヘリ調査を実施。

○10日のヘリ調査では、6日に確認された降灰の範囲が狭まり、山麓で明瞭な降灰の堆積は認められなかった。また、火口縁から乗り越えた溶岩の幅は約200m、末端までの長さは10m程度で、その他の箇所からの乗り越えは認められなかった。今後も火山の状況を注視しながら観測を継続する予定。

なお、新燃岳周辺の雨量観測所(矢岳観測所)で、3月5日に最大時間雨量約40mm、累積雨量約100mmの降水を観測したほか、3月8日にも累積雨量50mm超の降水を観測したが、土石流の発生は認められていない。



北西側の火口縁を乗り越えた溶岩の移動状況(上:3月9日15時30分頃、下:3月10日12時頃)



↓ 降灰が薄くなっている

高千穂河原ビジターセンター付近の降灰状況(3月6日、10日)

霧島山(新燃岳)におけるテックドクターによるヘリ調査の実施(平成30年3月9日)

○平成30年3月9日、火口付近の状況を把握するため、九州地方整備局が緊急災害対策派遣ドクター(テックドクター)である鹿児島大学の地頭菌教授と共にヘリ調査を実施した。

○テックドクターの所見については以下のとおり。

- ・火口内の溶岩表面には同心円状のしわが見え、火口の北西側の水蒸気が薄くなっているところで、幅約200mにわたり溶岩が火口縁を越えているのを確認。
- ・火口縁を越えている溶岩については、盛り上がった部分は高くないため、下に落ちたとしても少量と思われる。
- ・南側斜面で以前からリル・ガリ※が発達しており、今後の雨で新規・拡大する可能性があるため注意が必要。
※雨水等の集約した水により地表面が削られてできた細溝をリル、さらに侵食が進み沢状に発達した地形をガリと呼ぶ。



東側から撮影(3月9日15時頃)



火口縁を越えた溶岩の先端部分
上:3月9日15時頃 下:3月9日16時頃

周囲の岩の位置との比較で、15時から16時にかけての1時間で溶岩の先端はほとんど移動していないことが分かった



北西側から撮影(3月9日15時頃)

